

ロシアの中央アジア探險隊所獲品と 日本學者

高田時雄

一九六〇年にモスクワで國際東洋學者會議が開催された時、レニングラード（當時）へのエクスカーションが日程に組まれていて、その折りアジア諸民族研究所レニングラード支所を訪れた東西二人の中國學者は思いがけず一群の敦煌寫本の展示を目の当たりにすることになる。しかも聞けば同所に所藏される敦煌寫本の總數は一萬點に達するというのである。パリとロンドンのコレクションは誰もが知っているが、ロシアにこれほど大量の敦煌寫本が眠っているとは豫想できないことであった。いかにも彼らの驚きは想像に餘りある。時に一九六〇年八月十四日の午後、二人の學者とはフランスのポール・ドミエヴィルと日本の吉川幸次郎（Yoshikawa Kōjiro, 1904-1980）である。彼らはともにモスクワの會議の中國文獻學部會に出席していて、これはその期間内の出來事であった。第二次大戦後、ロシアに大量の敦煌文獻が所藏されていることを西側世界の研究者が知った最初の瞬間である¹。ちなみに同じ國際會議の中國史部會にはやはり日本から京都大學の宮崎市定（Miyazaki Ichisada, 1901-1995）、東京大學の山本達郎（Yamamoto Tatsurō, 1910-2001）の二教授が出席し、彼らもまたレニングラードで敦煌寫本を見た。山本は歸國後早速史學會の大會で「敦煌發見オルデンプルグ及びペリオ將來戸制田制關係文書十種」と題する報告を行っている²。

この會議に出席した人々のもたらした驚くべきニュースはまたたく間に日本の學界にひろまった。日本では敦煌寫本の研究は極めて盛んであり、折しもロンドンのスタイン蒐集寫本の寫眞がすべて日本に將來されたこともあり、五十年代後半から一層の活況を呈していた時期であった。したがってオルデンプルグが持ち歸った大量の敦煌寫本がロシアに存在するという情報は、限りなく日本の學者たちを刺激するものであった。京都大學の藤枝晃（Fujieda Akira, 1911-1998）は當時の日本において敦煌學の牽引車的な役割を果たしていた人物だが、ロシア所藏寫本のうわさが確實なものであると知ると、一九六四年秋に豫定していたロンドン、パリへの敦煌寫本調査に急遽レニングラードを追加することを決めた。その年の春、當時レニングラードの研究所で敦煌寫本目錄編纂の責任者であったメンシコフ教授と連絡を取った藤枝は、メンシコフから歓迎する旨の丁寧な返事

¹ドミエヴィルは先ず國際東洋學者會議の開催を報じる文章で簡単にロシアの敦煌寫本について觸れ、メンシコフ『目錄』が出版された後にやや詳しくロシア所藏敦煌寫本を概観する文章を發表した。一九六〇年の出來事はそれらの中に語られている。Paul Demiéville, “Chronique: Le XXVe congrès international des orientalistes”, *TP*, vol. XLVII (1959), 426-429.; “Manuscrits chinois de Touen-houang à Leningrad”, *TP*, vol. LI (1964), 355-376。一方、吉川はやはり歸國後、會議の出席報告と紀行文の中でこの時のことに言及する。吉川幸次郎「東洋學者會議出席報告」『東方學會報』1961年1月、「泰西風物：レニングラード」『新潮』1961年5月號、兩文ともに『西方からの關心』（東京：新潮社、1961年）に再録され、更に『吉川幸次郎全集』第十九卷（東京：筑摩書房、1969年）に收められた。いま『全集』本に據る。その376、396-397頁。

²その發表要旨は『史學雜誌』第69編第12號（1960.12）90-91頁に掲載されている。

をもらっていた。九月十二日にレニングラードに着いた藤枝は、十数日のあいだ敦煌寫本の調査で文字通り興奮に満ちた時間を過ごしたのであった³。

藤枝がレニングラードを訪問する一月餘り前、モスクワで開催された第七回人類學民族學國際會議に出席した京都大學の小川環樹（Ogawa Tamaki, 1910-1993）も、會議の終了を待たずにレニングラードの研究所を訪問し、メンシコフ氏を通じてオルデンプルグ蒐集の敦煌寫本やコズロフによってカラホトで発見された西夏語文獻を見學している⁴。小川は短い時間のうちに何點かの敦煌文獻を筆寫して歸った。それらのうち『毛詩音』殘卷の手抄本は、平山久雄（Hirayama Hisao, 1932-）に提供され、その詳細な音韻學的研究に利用された⁵。

その前年の一九六三年には、メンシコフ等ロシアの學者が編纂した『敦煌寫本目録』の出版が開始され⁶、またいくつかの文獻のファクシミリ版も出版されていた⁷。こういった出版物を通じてロシアの敦煌寫本は國際的にも益々注目を浴びることとなり、七〇年代、八〇年代には多くの外國人敦煌研究者がレニングラードを訪問するようになる。藤枝は一九七〇年にも再びレニングラードを訪れるが、同じように敦煌寫本を求めて同地に赴く日本學者の数は少なくなかった。一九九二年に上海古籍出版社から『俄藏敦煌文獻』が刊行されはじめ、必ずしもロシアまで行かずともロシア所藏の敦煌文獻を利用できるようになった後も、日本學者のペテルブルグ詣では跡を絶たないのが現状である。

敦煌寫本の研究は日本の中國學乃至東方學のなかでも一貫して重視されてきた、いわば特別な領域であった。そのため一九六〇年以降のロシア所藏寫本“再発見”が一層大きなセンセーションを巻き起こしたのは理由の無いことではない。ではそれ以前の時代にロシア探險隊の所獲品について日本の學者が全く没交渉であったのかと言えば、決してそうではない。むしろ日本學者の果たした役割には少なからず重要なものがある。以下に主として第二次世界大戦以前のロシア所獲文獻と日本學者の関わりについて瞥見してみたいと思う。

最初に取り上げるべきは狩野直喜（Kano Naoki, 1868-1947）である。狩野は明治の末年、草創間もない京都大學において中國文學及び哲學の講座を擔當した。同僚に歴史學者の内藤虎次郎（Naitō Torajirō, 1866-1934）がいたが、彼らは折しも革命の難を避けて京都に客居した中國の羅振玉（Luo Zhenyu, 1866-1940）、王國維（Wang Guowei, 1877-1927）等と協力して大いに敦煌學を鼓吹し、その發展に貢献した。狩野は一九一二年秋、敦煌寫本調査のため歐州に赴くことになり、その途次ペトログラードを訪れた。その時、狩野は偶々コズロフがカラホト遺跡から將來したばかりの文獻に接する機會を得た。狩野は京都の同僚たちに宛てた公開書簡の中で、西夏語文獻のほか、カラホト

³藤枝晃「レニングラードの東洋學アルヒーフ」『圖書』（岩波書店）、1966年1月號、37-40頁。

⁴小川環樹「レニングラードのこと」『圖書』1965年1月號、のち『談往閑語』（東京：筑摩書房、1987年）及び『小川環樹著作集』第5卷（東京：筑摩書房、1997年）に再録。いま『著作集』の453-458頁による。

⁵平山久雄「敦煌毛詩音殘卷反切の研究（上）」『北海道大學文學部紀要』14-3(1966), p.4。

⁶Описание китайских рукописей Дуньхуанского фонда Института Народов Азии, выпуск 1, Москва, 1963; выпуск 2, Москва, 1967.

⁷例えば、Рукописи из Дуньхуана. Памятники буддийской литературы сувеньсюэ. Издание текстов и предисловие Л.Н.Меньшикова, Москва, 1963; Бяньвень о вэймоцзе. Бяньвень «Десять благих знамений», Издание текста, предисловие, перевод и комментарии Л.Н.Меньшикова, Москва, 1963

発見の漢文文献の幾つかに言及し、その「學術的價値は敦煌寫本に匹敵すべきもの」と高く評價しているが、特にそれらのうち宋槧列子斷片、宋槧呂觀文進注莊子、雜劇零本、宋槧廣韻斷片などの書名を擧げている⁸。狩野はまた數多くの精巧な佛畫の存在に言及するとともに、有名な平陽姫家彫印の四美人の版畫について「珍の又珍なるもの」と絶讃したうえ、その寫眞を持ちかえった⁹。滞在中、狩野はイワノフ（А.И.Иванов）及びアレクセイエフ（В.М.Алексеев）と交流を深め、ラードロフ（В.В.Радлов）やシュテルンベルグ（Л.Я.Штернберг）といった學者とも會った。

これは後の話になるが、一九二八年、狩野の還曆記念に際して、アレクセイエフは上記の『劉知遠諸宮調』とオルデンプルグ敦煌蒐集中の『文選』の寫眞とを狩野に提供した。それには當時大阪外國語學校に奉職し、京都大學の講師を兼ねていたネフスキー（Н.А.Невский）の熱心な仲介があったとされる¹⁰。後者の敦煌本『文選』に就いて、狩野は漢文で「唐鈔本文選殘篇跋」を認め『支那學』誌上に發表したが¹¹、この論考はほぼ同時に當時日本に居たシューツキー（Ю.К.Шуцкий）がロシア語に翻譯し、アレクセイエフの推薦によりソビエト連邦科學アカデミーの紀要に掲載された¹²。ロシア所藏敦煌漢文文献に對する最初の本格的な研究として、また東方學の分野における日本とロシアの學術交流史の第一頁を飾る事例として、この一文は記念碑的な意味を有する。一方、『劉知遠諸宮調』は、やや遅れて一九三二年に、狩野の高弟青木正兒（Aoki Masaru, 1887-1964）による詳細な研究が同じ『支那學』に掲載され¹³、文學史的な價値が闡明されるとともに、學界の大きな注目を集めた。

狩野に遅れること二年、京都大學の新進學者であった羽田亨（Haneda Tōru, 1882-1955）がロシアへ出張を命じられ、短い期間ながら露都に滞在した。主たる目的はラードロフについてウイグル語を學習するためであり、當時出來上がったばかりの大谷探險隊將來ウイグル文「天地八陽神呪經」の翻譯を攜えてラードロフの意見を叩いたが、ラードロフは羽田の歸國後ただちに同經典の斷簡數種を送って寄越し、研究の進捗を助けた。それら斷簡はオルデンプルグ（の第一次探險隊）、

⁸狩野直喜「海外通信（一）」『藝文』第四年第一號、1913年1月、のち『支那學文叢』（東京：みすず書房新版、1973年）に再録、その332-335頁。ちなみに狩野が雜劇零本というのは有名な『劉知遠諸宮調』のことである。現在カラホトの漢文文献にはメンシコフの編になる目録があり、その番號を用いて言えば、最初の列子を除いて、これらの文献はそれぞれ260、274、280番に当たる。不思議なことに列子はメンシコフ目に見えないが、或いは狩野が莊子（261）と取り違えたものかも知れない。Л.Н.Меньшиков, Описание Китайской части коллекции из Хара-хото (фонд П.К.Козлова), Москва, 1984を参照。

⁹該圖は1916年3月の『藝文』第七年第三號誌上に、植田壽藏（Ueda Juzō, 1886-1973）の解説を附し、口繪として掲載された。寫眞のガラス乾板は現在京都大學人文科學研究所に保存されている。四美人の圖はまた美術史家瀧精一（Taki Seichi, 1873-1945）によって批評紹介された。節庵（瀧精一）「黒城發掘の古版畫」『國華』第349號（1919年12月）。瀧は早くからゴズロフ將來の繪畫に注目し、それらの紹介に努めた。瀧精一「中亞の發掘品と我淨土教美術の起源」『國華』296號（1915年1月）、同「黒城發掘來迎圖」『國華』同號。

¹⁰神田喜一郎「狩野先生と敦煌古書」『東光』第5號（1948）、46頁。

¹¹『支那學』第五卷第一號（1929年3月）、153-159頁。この文章はまた『東洋學叢編』第一冊（靜安學社編、東京：刀江書院、1934年）にも收められ、また著者の『讀書餐餘』（京都：弘文堂書房、1947年；新版は東京：みすず書房、1980年）、『君山文』（京都、1959年）にも再録されており、そのうち『東洋學叢編』のものには寫本のファクシミリも附載されている。ちなみに『支那學』の同じ號には、上記「四美人圖」に關する那波利貞（Naba Toshisada）の詳細な研究が見えている。那波利貞「ゴズロフ氏發見南宋時代版畫美人圖跋」『支那學』第5卷第1號（1929年3月）。

¹²Н.Кано, О фрагменте старой рукописи «Литературного сборника», хранящегося в Азиатском музее Академии наук, — ИАН СССР, ОГН, 1930, ser.VII, No.2, стр.135-144. このロシア語論文については、ペリオによる簡単な紹介がある。TP, XXVIII, 1931, 165-166.

¹³青木正兒「劉知遠諸宮調考」『支那學』第六卷第二號、1932年、21-56頁。

クロトコフ (H.H.Кротоков) 等の將來品であり、そのうちの一點は實に大谷本に缺けた卷首を補うものであった。羽田は早速、論文の補遺を公刊するとともに、ラードロフの好意に感謝を表明している¹⁴。のちラードロフの逝去の報に接した羽田は、「ラードロフ博士」という一文を草して、當時の交遊を回顧すると共に、その生涯と學問を詳しく紹介している¹⁵。狩野から話を聞いていたこともあり、羽田はイワノフの東道によってコズロフ隊の將來資料を種々見學したことも報告されているが、それらに就いて直接に研究を進めることはなかった。

狩野と羽田が露都を訪問したころ、オルデンブルグの敦煌寫本はまだ到着していなかったから、それを見ることが出来なかったのは當然である。それを始めて眼にしたのは矢吹慶輝 (Yabuki Keiki, 1879-1939) である。精力的にスタイン將來の佛教文獻を研究し、大著『鳴沙餘韻』(Meisa Yoin) 『三階教の研究』(Sangai kyō no kenkyū) を著した矢吹は、一九一六年十二月、その第二回のロンドン行の歸途にペトログラードに立ち寄り、到着してまもない敦煌古寫本を閲覽した。彼はシルヴァン・レヴィの紹介でオルデンブルグに面會し、オルデンブルグから更にアジア博物館のアレクセイエフを紹介してもらい、その世話で數百點の古寫本を見たのだという。矢吹の報告はごく簡単なものであるが、目睹し得た經卷のうち二十點ほどの文獻の卷末識語が記録されている¹⁶。その末尾には敦煌文獻のなかでも最も新しい紀年とされている宋の咸平五年 (1002) 「燉煌王曹宗壽編造帙子入報恩寺記」がそこにすでに見えるのが注意される。矢吹は筆記が國境で沒收されることを恐れ、前もって二通の寫しを作り、一通を書簡として郵送し、一通を攜帶したと語っていて、その苦心を想像させるが、この報告は必ずしも十分に日本の學界に注意されたとは言えないようである。日本ばかりではなく、外國の學者もこの時期にロシアの敦煌寫本について觸れたものはない。矢吹のこの短文はあるいはこの時期にオルデンブルグの敦煌寫本を外國人が實際に見て書いた報告として唯一のものかも知れない。事實、上で見たように、一九六〇年の時点まではロシアに敦煌寫本の存在することを世界のほとんどの學者が知らなかったのである。革命とその後の政治的混亂はロシア國內においても敦煌寫本に多大の關心を寄せる状況にはなかったようで、僅かにフルークが二十世紀の三〇年代にその整理に手を着けただけであった。一九四二年に彼が不幸な死を遂げたあとは、その仕事を繼續する者はなく、一九五七年になってようやくメンシコフ等のグループが本格的に目録作成に乗りだすまで放置されるのである¹⁷。もちろんソビエト時期の國際環境を考慮すれば、たとえ矢吹の報告に觸發されたとしても、敦煌寫本の研究を目的としてソ聯に出かけるなどということとはよほど困難なことであっただろう¹⁸。

ところで第二次大戦前に、日本の學者として、ロシアにも敦煌寫本が存在することに氣付いていた人物に石濱純太郎 (Ishihama Juntarō, 1888-1968) がいる。石濱は自身でロシアの土を踏むこと

¹⁴羽田亨「回鶻文の天地八陽神呪經補遺」『東洋學報』第五卷第三號、1915年9月、401-407頁。なお該論文の本編は『東洋學報』第5卷第1號(41-78頁)、2號(189-228頁)に掲載されている。

¹⁵羽田亨「ラードロフ博士」『藝文』第十年第七號、1919年7月、704-712頁。

¹⁶矢吹生「露都ペトログラードに於ける古經跋及疏讀類」『宗教界』第13卷第5號、1917年、407-409頁

¹⁷Л.Н.Меньшиков, Описание, Предисловие を参照。

¹⁸1932年、東京大學の中國文學教授であった鹽谷温 (Shionoya On, 1878-1962) がヨーロッパへの途次、偶々レニングラードを訪れ、コンラートや、ネフスキー、チュースキーに會い、西夏文獻などを見たことを記録している。しかし彼が目録とした『劉知遠諸宮調』は結局本箱の鍵が見つからず觀ることが出来なかったと書いている。また敦煌寫本については一言も觸れるところがない。鹽谷温『王道は東より』、昭和九年、東京・弘道館、237-8頁。

はなかったものの、ロシアの探險隊の業績とその將來品に深い關心を寄せていた。彼は東京大學で中國文學を修めたが、父の早逝によって一九〇一年の卒業とともに郷里の大阪に戻り、家業の製藥會社を繼承した。内藤湖南（虎次郎）に私淑し、後に在野の學者として八面六臂の活躍をすることになるこの人物はまた、中國本土はもとより、滿蒙から中央アジア、インドに至るまでの、きわめて幅廣い領域に興味をもち、恵まれた經濟的條件を十二分に活用して、東洋學に關する非常に豊富なコレクションを作り上げた¹⁹。特に當時としては珍しくロシアの文獻を積極的に収集していた彼は、ロシアの學術動向を誰よりも熟知していた。彼は一九二七年の『支那學』に寄せた一文中で、新着のロシア雜誌に載ったローゼンベルグ（Ф.Розенберг）の論文のタイトルに「（オルデンプルグ隊將來の）敦煌千佛洞出土」とあるのを見て、オルデンプルグ第二次探險隊の所獲品のことを知り、さらに論文の記述から所獲品の大部分が漢文文獻で、あとはソグド文二葉、梵文、ウイグル文、西夏文の斷片であること、そしてアレクセイエフが目録作成中であると述べている²⁰。フルーク以前にアレクセイエフが目録に着手していたという情報は、かつて矢吹が敦煌寫本を見るに當たって、オルデンプルグがアレクセイエフを紹介したということと考え合わせれば納得が出来る。當初、オルデンプルグの敦煌寫本の整理はアレクセイエフに委ねられていたものらしい。ただ石濱がどうも上記矢吹の報告を知らなかったらしいことは、その博識を考えるとやや意外な感がある。さらにせつかくの石濱の指摘²¹を後の學者たちが看過していたのも不思議な話であるが、様々な意味で餘りにも遠いロシアのことであってみれば、學界全體に充分な認識が確立しなかったのは致し方ないかも知れない。

ロシア探險隊所獲品の研究を語るに際して、我々は石濱の西夏語に對する貢獻についても忘れず觸れるべきであろう。それはロシア人學者ニコライ・ネフスキー（Н.А.Невский, 1892-1937）との協力によって生み出された。一九二二年、石濱は設立されたばかりの大阪外國語學校の蒙古語部に専科生として入學し、二年間モンゴル語を學んだ。蒙古語の講師は京都大學から出講していた羽田亨であった²²。その時、ネフスキーもちょうど小樽高等商業學校から轉じて大阪外國語學校のロシア語教師となったばかりで、二人はこの學校で運命の出会いをすることとなる。ペテルブルグ大學の中國・日本學科で學んだネフスキーは、一九一五年に大學から二年間の豫定で日本留學を命じられ、コンラート（Н.И.Конрад）やローゼンベルグ（О.О.Розенберг）等とともに東京で勉學に勵んだ²³。やがてロシアで革命が勃發すると、恩師アレクセイエフの勧めもあり當面歸國を取りやめ日

¹⁹その全藏書四萬二千二百餘冊はのち大阪外國語大學に歸し、石濱文庫として保存されている。その目録は『大阪外國語大學石濱文庫目録』（1977年、大阪外國語大學附屬圖書館編）として公刊されている。

²⁰石濱「敦煌雜考」『支那學』第四卷第二號（1927年3月）、147-148頁、第二節「露國の蒐集」。ローゼンベルグの論文は、Fr. Rosenberg, Deux fragments sogdien-boudhiques du Ts'ien-fo-tong de Touen-houang (Mission S. d'Oldenburg 1914-1915), *Mélanges Asiatique, tirés du Bulletin de l'Académie des Sciences de Russie*. Nouvelle Série. 1918.

²¹石濱はまた別の機会にもオルデンプルグ蒐集敦煌寫本の存在に言及している。石濱純太郎「ロシアの東洋學」『東洋史研究』第一卷第六號（1936年8月）、のち『東洋學の話』（1942年、東京：創元社）に収録、その240頁。

²²『大阪外國語大學70年史』（同刊行會、1992年）、15頁。

²³ネフスキーはそれ以前、一九一三年の夏休みにも東京に滞在し、日本文學を研究したとされるが、詳しい動靜は分からない。ちなみにネフスキーの生涯については、ロシア語ではЛ.Л.Громковская и Е.И.Кычанов, Николай Александрович Невский. М., 1978、日本語では加藤九祚『天の蛇——ニコライ・ネフスキーの生涯』（東京：河出書房新社、1976年）があったが、近年の新しい知見を盛り込んだグロムコフスカヤ（Л.Л.Громковская）編「ネフスキー特集」が『ペテルブルグ東方學』第八巻中に収められ（Николай Невский. Переводы, исследования, материалы к биографии, Петербургское Востоковедение, выпуск 8, Санкт-Петербург, 1996, стр.239-560.）、ネフスキーの論文や翻譯、書簡、傳記資料など

本で様子を見ることとしたが、ロシアからの送金が途絶えたため、生活の道を探らざるを得ず、東京の亡命ロシア人の経営する商社に勤務した。その後、一九一九年からは小樽高商でロシア語の教師をしていたのである。この頃のネフスキーの関心は日本民俗学であり、柳田國男 (Yanagida Kunio, 1875-1962)、折口信夫 (Origuchi Sinobu, 1887-1953)、中山太郎 (Nakayama Tarō, 1876-1947) などと頻りに交遊した。さらに北海道への赴任をきっかけに金田一京助 (Kindaichi Kyōsuke, 1882-1971) のアドバイスを受けて、アイヌ語の研究を始め、また琉球の宮古方言の研究にも手を伸ばした。大阪に移ってからも相変わらず民俗学や方言の研究に強い関心を持ち、大阪外語の同僚であった浅井恵倫 (Asai Erin, 1895-1983) とともに台湾で現地住民の言語調査も行っている²⁴。しかしネフスキーは次第に石濱の強い勧めによって西夏語の研究にも手を染め、石濱と二人三脚で数多くの論考を發表することになる²⁵。ネフスキーは一九二五年には大學時代の恩師の一人イワノフを北京に訪ねて西夏語文獻の提供を受け²⁶、またレニングラードの同僚に頼んでロシアに所蔵する文獻の寫眞を送ってもらった。石濱としてはロシアの材料が入手できる便があり、ネフスキーとしては石濱の豊富な蔵書を参考資料として利用できる利點があった。結局、一九二七年から一九三三年までのあいだに彼らが連名で發表した論文は七編に及ぶ。それらはすべて日本において日本語で發表されたものである²⁷。一九二七年七月、高橋盛孝 (Takahashi Moritaka) の提案に賛成するかたちで、石濱とネフスキーは浅井恵倫、笹谷良造 (Sasatani Ryōzō, 1901-?) 等と語らって“静安學社” (Societas Orientalis Osaka'ensis in memoriam Wang Kuo-wei) を起こした。静安とは近代中國の傑出した學者王國維の字であるが、王はこの年の五月に北京の清華園昆明湖に身を投げて自死したばかりであった。その王國維を記念して學會の名稱にしようと言い出したのはネフスキーであったという²⁸。この學會にはネフスキーの關係でプレトネル (O.V.Плетнер)、コンラート、シューツキーといったロシア人學者の名が社員乃至社友として名を連ねている。その第一回集會にはちょうど來日していたコンラートが「サウエトロシアに於ける東洋學研究」と題する講演を行った²⁹。この學會が東洋學における日本とロシアの學術交流に果たした役割は無視し得ないものがあるが、それは主として石濱とネフスキーの協力關係の上に築かれていたのである。彼らの西夏語の研究成果は逐次この學會の例會で報告された。

ネフスキーはまた日本の友人がロシアに行くときには、必ずレニングラードの同僚たちへの紹介状を書いた。石濱純太郎は師と仰ぐ内藤湖南が一九二四年七月から約二ヶ月、ヨーロッパへの敦煌

の新しい資料が公開されたが、最近日本でもその成果も取り入れつつ各種資料を網羅した生田美智子編『資料が語るネフスキー』(大阪外國語大學、2003年)が出版された。小文は多くをこれらの先行研究に負っている。

²⁴ これらの研究成果の一部はネフスキーのロシア歸國後、科學アカデミーの紀要に發表され、また七〇年代以降になって遺稿が整理され公刊された。Айнский фольклор / сост. Л.Л.Громковская. М., 1972; Фольклор островов Мияко / сост. Л.Л.Громковская. М., 1978; Материалы по говорам языка цоу: Словарь диалекта северных цоу / сост. Л.Л.Громковская. М., 1981.

²⁵ このあたりの事情は石濱自身が語っている。石濱純太郎「西夏語研究の話」『徳雲』第五卷第三號(1934年11月)、のち『東洋學の話』に収録、その194頁以下を参照。

²⁶ 北京から石濱純太郎に宛てた二枚の葉書が大阪外國語大學の石濱文庫に残っている。『資料が語るネフスキー』162-163頁。

²⁷ ここには一々論文名を挙げない。「石濱純太郎先生著作目録」『石濱先生古稀記念東洋學論叢』(石濱先生古稀記念會、1958年)、及び「ネフスキー著作目録」250-253頁を彼此参照されたい。

²⁸ 石濱純太郎「静安學社」『藝文』第十八年第八號(1927年8月)65頁。

²⁹ 上掲『資料が語るネフスキー』36-46頁「静安學社」の項を参照。

寫本調査に出かけた際、それに同行した。しかし一行は「歸途ロシア、アメリカ旅行を企つるもいづれも果たさず」³⁰、マルセーユより海路歸國した。結局使われずに終わったネフスキーのアレクセイエフ宛の紹介状が石濱文庫に残されている³¹。また一九二九年春、ヨーロッパ留學に際し、往路ソ聯に滞在する豫定であった民族學者岡正雄（Oka Masao, 1898-1982）に對して、ネフスキーはイワノフやコンラートに宛てた紹介状を書くとともに、西夏文書の寫眞撮影を依頼している³²。ネフスキーは日ロ學術交流の架け橋の役割を果たしていた。

一九二九年九月、ネフスキーがソ聯に歸り、レニングラード大學の助教授となった後も、二人の協力關係は繼續した。その連絡の様子は當時ネフスキーが石濱に宛てた書簡から窺うことが出来る³³。ネフスキーは西夏語研究の進展について書いて寄越すとともに、しばしば石濱に參考資料の送付を依頼し、石濱もそれによく應えたようだ。石濱はまたこの頃アレクセイエフの依頼に應えて、ネフスキーの業績に關する報告を書いている³⁴。おそらくアレクセイエフがネフスキーをアカデミーに推薦するかなにかのために、ネフスキーの學術活動を最もよく知る石濱に依頼したものであろう。しかしやがて時代は暗轉し、一九三七年十月、ネフスキーは突然逮捕され、翌月“人民の敵”として銃殺された。その名譽回復は二十年後の一九五七年、そしてようやく一九六〇年になりネフスキーの西夏語に關する遺稿が『西夏文獻學』³⁵として出版され、その二年後にはレーニン賞が授與された。石濱とネフスキーの共同研究は突然の不幸な出來事によって終末を告げることとなった。しかし彼らの蒔いた西夏語研究の種は日本とロシアの雙方で芽を吹き、西田龍雄（Nishida Tatsuo）やクィチャノフ（Е.И.Кычанов）等の手によって大きな進展を見ることになる。

管見の限りでは、戦前期の日本學者とロシア探險隊所獲品との關わりは、少なくとも文獻研究については以上に盡きる。しかし最後にもう一つ日本人學者の貢獻について附言すべきことがある。それは梅原末治（Umehara Sueji, 1893-1983）のノイン・ウラ發見遺物の研究である。コズロフは一九二四年～二五年にウランバートル北方のノイン・ウラ古墳群で大量の匈奴の文物を發見した³⁶。これはカラホト遺跡の發見とともに、コズロフの二大業績の一とされているものであり、現在エルミタージュ博物館では、ノイン・ウラ遺跡の展示に特別の一室が設けられている。一九二六年夏、梅原はケンブリッジ大學のミンス（Ellis H. Minns）の紹介でたまたま英國を訪れたオルデンプルグに會った。その時の會話がきっかけとなって、翌一九二七年の秋レニングラード行が實現した。梅原はかくしてコズロフが持ち歸ったノイン・ウラ發見の遺物を調査する機會を得ることと

³⁰ 「石濱純太郎先生年譜略」『石濱先生古稀記念東洋學論叢』、7頁。

³¹ 『資料が語るネフスキー』185頁。

³² ネフスキー『月と不死』（東京：平凡社、1971年）への岡正雄の序文、4頁。

³³ 『資料が語るネフスキー』144-161頁。

³⁴ ロシア科學アカデミー文書館資料 Фонд 820 (В.М.Алексеев). Оп.4, ед. хр.53. Исихама Дзюнтаро. Отзыв о научных трудах и научной деятельности Н.А.Невского.

³⁵ Тангутская филология: исследования и словарь. Кн.1-2. М., 1960.

³⁶ この發見については以下を参照。Краткие отчеты экспедиций по исследованию Северной Монголии в связи с Монголо-Тибетской экспедицией П.К.Козлова. Ленинград, 1925. 英語による紹介は前者に據った P.Yetts, "Discoveries of the Kozlov Expedition", *The Burlington Magazine*, Vol.XLVIII(1926), 168-185. があり、日本語では以下の羽田亨の紹介が要領を得ている。羽田「外蒙古におけるコズロフ氏の發掘」『朝日新聞』（東京）1927年3月6日～9日、のち『羽田博士史學論文集』下巻、569-580頁。また近年、コズロフによるこの最後の調査の日記が公刊され、それによって發掘の様子がよく分かるようになった。Петр Кузьмич Козлов. Дневники Монголо-Тибетской экспедиции 1923-1926. (Научное наследство, Том 30), Санкт-Петербург, «Наука», 2003.

なる。梅原は翌年の秋にも再びロシアの土を踏み、研究を續行した。當時のロシア當局が新發見の發掘物の研究を外國人に委ねたという事實は特筆に價するが、残念ながらその成果の公刊は戦争により遅延し、一九六〇年になってようやく東京の東洋文庫から出版された³⁷。ノイン・ウラの文物にはスキト・サルマティア系の特徴が認められるが、副葬品は漆器や絹織物など中國からもたらされたものが大部分を占める。いずれも當時の匈奴貴族の生活を窺う貴重な資料である。

一九三〇年、日本では東亞考古學會の計畫として日ソ間の文化交流に道をつけるため學者を派遣することになった。たまたま豫定されていた羽田亨が父君の病氣と自身の体調不良のため、急遽梅原が代理としてソ聯邦を訪れることになった。この時期のソ聯は數年前とは社會情勢が一變しており、緊張した雰圍氣が感じられたという。ともあれレニングラードでは新たに天山北部のシベトパズリックから出土した馬具などを見學した。注目すべきはオルデンプルグのもたらした千枚を越す敦煌千佛洞壁畫の寫眞を眼にしたと言っている點である³⁸。これらの寫眞は今もペテルブルグの東方文獻研究所に保存されており、最近中國からその一部が出版された³⁹。

以上は日本人がロシアの中央アジア探險隊所獲品に關與した事例を各種の資料から拾い集めてみたに過ぎない。それらはほとんどゴズロフとオルデンプルグの所獲品に集中していることが分かる。しかしロシアの中央アジア探險隊のもたらした發掘品は勿論それにとどまるものではなく、トルファン地區をはじめとして多くの遺跡から多様な材料が發見されていることは周知の通りである。戦前期の日本人はロシア探險隊の成果について詳しい情報を持たなかったし、それらの豊富な發掘物に接觸することが出来なかったのは、時代状況を考えればやむを得ない。しかし過去十數年のあいだに、日本とロシアの新たな協力關係は着實な進展を見せ、すでにロシア所藏文獻の共同研究の成果も幾つか生まれつつある。ロシア探險隊の成果の全貌が明らかになりつつある今こそ、日ソ間の更なる協同が強く期待される。

³⁷ 梅原末治『蒙古ノイン・ウラ發見の遺物』（東洋文庫論叢第 27 冊）、東京：東洋文庫、1960 年。

³⁸ 以上、梅原とロシアとの關わりはすべて、梅原末治『考古學六十年』（東京：平凡社、1973 年）によった。その 83、104-111、122-125、149-155 頁を参照。

³⁹ 『俄羅斯國立艾爾米塔什博物館藏敦煌藝術品』第六卷、上海古籍出版社、2005 年。